

第9回シェイクスピア・ワークショップ

- メンバー： 石橋 純二 (青山学院大学大学院・博士後期課程)
大林あゆみ (お茶の水女子大学大学院・博士後期課程)
藤田 隆馬 (立命館大学大学院・博士課程)
矢野 清一 (北九州市立大学卒)
藪内 彩奈 (早稲田大学大学院・修士課程)
- 司会： 藤田 隆馬
- コメンテーター： 田中 一隆 (弘前大学教授)
鶴田 学 (福岡大学准教授)

(要旨)

第9回シェイクスピア・ワークショップが2014年10月12日(日)、学習院大学にて開催されました。コメンテーターに弘前大学教授の田中一隆先生と福岡大学准教授の鶴田学先生をお迎えし、5人のメンバーによる研究発表とディスカッションを行いました。ワークショップでは、各研究テーマの作品解釈や知識を共有することができ、今後の研究方針について考える点で有意義な活動となりました。

石橋さんは「シェイクスピアのリチャード三世像の考察—リチャードの造形過程と『リチャード三世』の二重構造を踏まえて—」というタイトルでリチャード像の分析に関して発表されました。リチャードは、その外見的特徴から肉体・精神的の両面にわたって数多くの罵詈雑言を投げかけられる等、邪悪な人物であることが強調されます。しかしながら、リチャードの外見に対する罵りの多くは、女性が登場する場面で顕著であり、リチャードが王権を獲得する政治的駆け引きの場面では影を潜めます。これは、作家がリチャードを悪人として描きながらも、その政治面においては評価していたことを暗に示しているように思われます。このことを若き日のリチャードが登場する『ヘンリー六世三部作』にも遡って、リチャードと彼に対する登場人物の台詞から検証されました。

大林さんの「ボヘミアの海岸—『冬物語』における理性と脅威—」では、『冬物語』の劇の構成が、観客に驚き(wonder)と純粋な脅威(marvel)を引き起こす効果を生んでいると発表されました。シェイクスピア劇で死者が復活する場合、観客はその人物が実は生きていることを事前に知らされる場合がほとんどです。しかしながら、『冬物語』におけるハーマイオニ生存のヒントは、復活の場面直前まで全く示されません。そのため、ハーマイオニの復活は、観客に純粋な驚きを持って迎えられる。この脅威を最も効果的に演出する為、復活の場面に至るまでに、劇ではその強調点が理性から超自然的なものへとシフトするような演劇的構造を持っています。劇前半部では、レオンテーズらによる理性に基づく台詞が、人々の認識の差異を生む結果となり、理性の持つ

悲劇的な側面を観客に提示しています。そして劇後半部では、オートリカスらによって理性的な言語がパロディとして示される一方で、海岸のあるボヘミアという架空の場所を劇の転換部に置くことで、理性から隔たった超自然的な世界へと舞台が移動したことを観客に認識させ、さらに、熊や嵐といった視覚的な演出によって、より劇的な仕掛けに注目するよう観客は誘導されます。観客が理性的な言葉ではなく、目の脅威を受け入れるようになる劇的構成をまとめられました。

矢野さんは「シェイクスピアとジョージ・エリオットに観られる人間性について—純粋(pure)をキーワードとして—」という題目で発表されました。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』、エリオットの『フロス河の水車場』両作品には、「肉体」を超える「純粋な」愛に生きている点が共通しています。エリオットは、マギーが小麦粉の香りを楽しむ牧歌的な水車場の内側を、外界から切り離された純粋な別世界、聖域のように描写しています。このマギーによる純粋さは、マギーとトムが精神的に協力する兄妹愛によって更に強調され、作品における内なる存在を尊ぶ構造を生み出しています。この世俗的な肉体よりも、内なる精神的存在を重要視する描写は、『ヴェニスの商人』にも見られます。エリオットは、シェイクスピア劇における、「人間が万物の霊長」との人間観を継承し、『フロス河の水車場』に反映しているのです。両作品には、時代を超えた、「神」を持って初めて人間性を得るのだ（人間中心主義的愛）という共通性が見られることを指摘されました。

藪内さんの「*The Merchant of Venice* (c. 1598)における性と貨幣」では、『ヴェニスの商人』と娼婦が頻繁に登場するマイケル・ラドフォード (Michael Radford) の翻案映像作品に関して考察されました。特に注目したのが、かつて高利貸しと娼婦が、不自然な生殖行為者と見なされた節がある点です。アリストテレスは、子を産まないはずの金が利子を産むことの反自然性を指摘していました。その一方で、トマス・アクィナスらは売春・避妊に関して、子を産まない性行為の反自然性を指摘しています。つまり高利貸しと娼婦は、子を産まないはずの物に産ませる/子を産むはずの行為から産まないというパラドクスが垣間見られる点で共通しているのです。『ヴェニスの商人』では、高利貸しシャイロックは羊の繁殖話で利子を正当化し、バツサーニオがポーシャを語る際には女性関係と金が平行するかの様な口ぶりでした。また、ベルモントで求婚者の道徳性を試す箱選びの場でさえも、種本では女性との一晩と金とが平行するかの様な場として語られる節があります。これらを鑑みるに、執筆時にこれらが意識されたかは不明ながら、『ヴェニスの商人』では、高利貸しと娼婦が抱えるパラドクスを反復している様に思えます。一方ラドフォードの映像版では、利子のセクシュアリティはあえて削除され、ヴェニス人の過剰な食欲の描写が、彼らの肉欲を暗示する様に表現されます。そのため、利子なしで金を貸与したシャイロックをもてなす宴会は、まるでそれが利子の代わりである様に見える点で、高利貸しと娼婦のパラドクスを再現しているようだと論じられました。

藤田は「トマス・デッカーの『靴屋の祭日』における家父長像」というテーマで、劇の主人公である靴屋の親方サイモン・エアの家父長像が、劇を通してどのように描写されているか発表しました。エアは、血縁関係のない職人達と擬似家族の関係にある、当時の徒弟社会を反映した、特殊な立場にある家父長です。しかしながらエアは、他の封建時代を代表する厳格な家父長達とは対照的に描かれ、次第に理想の家父長であると賛美されるのです。家族の不満を解消し、共同体の和を重んじるエアは、ロンドンの長官・ロンドン市長と順調に出世し、他者を満足させようとする歓待の精神を発揮します。その中で、自身の富を惜しみなく人々に還元し、また自分の靴職人ハンスとその恋人であるローズを保護するエアは、理想の家父長・代理父として重ねて提示されるのです。終幕では、エアの示す家父長像が王によって実践されることで、理想的な共同体の支配者像が、為政者にも転用できることが示されます。こうして劇作家デッカーは、エアを理想の家父長として描くことで、自身の理想とする為政者像をも描き出していると論じました。

今回のワークショップでは、取り扱う作家・作品・テーマが大きく異なるメンバーが集まり、また作品に対する共通認識も異なる中で発表準備に取り組んだため、内容に踏み込んだ意見交換が難航してしまいました。その点に関しましては、コメンテーターの田中一隆先生、鶴田学先生にもご指摘いただいたように、それぞれが議論できる共通点を見つけるため、互いに歩み寄ることが必要だったと思います。しかしながら、様々なテーマに関する考察は、同時にとても新鮮なものでした。シェイクスピアを初めとする近代初期イングランドの演劇・劇作家、また英文学作品に共通する可能性に少しばかり触れられたように感じています。

最後になりましたが、当日のフロアには多くの先生方にお越しいただきました。ワークショップ後、個々にお声をかけていただいた先生もいらっしやり、温かいお言葉や発表の感想、文献に関する情報等を頂戴しました。ありがとうございました。また、今回のワークショップ立ち上げからお世話になりました石橋敬太郎先生、ワークショップ委員の阿部曜子先生、佐野隆弥先生、前原澄子先生、コメンテーターの田中一隆先生と鶴田学先生、そしてワークショップに携わっていただきました全ての皆様に、メンバー一同改めてお礼申し上げます。同じ文学研究に携わる仲間と出会えまして、今後の研究に対する励みとなりました。これからも、研究活動に精進して参ります。

